

したがって、テント切痕陥入などによる脳幹の重篤な障害の把握に ABR は有用。一方、blink reflex は橋延髄レベルの軽度の機能障害の評価に有意義である。

20. spike-wave stupor の1例

(神経精神科) ○堀川 直史・坪内 直子・
浅野 欣也・柴田 収一

spike-wave stupor の1例を経験したので報告し、主として患者の回想に基づいてこの挿間状態を心理学的に分析し、合わせて現在なお議論のつきないいわゆる意識障害の問題についても若干の考察を加える。

症例は25歳の女性、大発作と欠神発作とを合わせ持つ mixed type のてんかん患者である。spike-wave stupor と考えられる挿間状態は約20時間持続し、その間に描記した脳波に3ないし4/secの全般性両側同期性棘徐波結合の持続的な出現を認めた。

この挿間状態中に、思路の渋滞、意図的な回想力の低下、意志転導性の亢進、反響動作、保続、自動運動、一部の感覚刺激の鋭敏化、見当識障害などの症状が認められたこと、また後に部分的健志を残したことなどから、この状態は一般に軽い意識混濁状態、すなわち昏睡状態と判断される。

以上の症状をわれわれは心理学的に分析して、次の結論を得た。1) これらの症状は、領取と意志という自我の二能体において、それぞれ対象把握と目的設定として現われる自我の連繫機能の低下に由来する。2) 縦断的に見れば、この事態は生活史的連続性の中断を意味し、それによつて見当識障害が生ずるとと思われる。

以上の結論は、領取と意志との二側面にわたる能作の障害、すなわち自我機能障害を示すが、覚醒障害の有無をこれによつて判断することはできない。自我機能障害は心理学的概念であり、覚醒障害は神経生理学的概念であつて、両者は明確に区別されるべきものである。覚醒は自我機能成立の基盤ではあるが、これと同一ではない。この症例に見られたような自我機能障害は、覚醒障害なしにも、痴呆、Korsakow 症候群、一部の内因性精神病などにおいて出現すると考えられる。

21. 各種 Syndrome の口腔領域の再検討

(1) Supravalvular Aortic Stenosis Syndrome の1症例

(口腔外科) ○釣谷 経子・河西 一秀

Supravalvular Aortic Stenosis Syndrome は、先天性の大動脈弁上部狭窄に特徴的顔貌と知能低下を合併した症候群であり、今回われわれは本疾患において今まで知ら

れている口腔症状の再検討をセファロ分析により精査したので報告する。患者は9歳女子、母親正常分娩、生下時体重2,700g、8歳の時本学小児科を受診、その間心研小児科へ受診し、心カテ目的で転科入院となり、入院後口腔精査のため当科に紹介された。当科では特に口腔状態を頭部X線規格写真および顎模型分析により精査したが、 $\overline{2}$ $\overline{2}$ 欠損と上顎前突以外にこの症候群の歯科領域における特徴は認められなかつた。また母親にも先天性の $\overline{1}$ $\overline{1}$ 欠損が認められた。

22. 急性ウイルス性肝炎の臨床的検討

(消化器病センター 内科)

○藤野 信之・久満 董樹・竹田 佳子・
奥田 博明・本池 洋二・小幡 裕

目的：急性ウイルス性肝炎例を起因ウイルスからA型、B型、および非A非B型に群別し、それぞれについて発生様相、臨床所見、経過などについて検討した。

対象および方法：昭和49年より54年末までの6年間に当センターに入院した急性肝炎172例のうち、初期からの血清が得られ血清ウイルス学的に起因ウイルスを確認し得た113例を対象とした。HA抗体をRIA法(HAV AB)で測定し、IgG処理でIgM分画HA抗体の存在を確認し得たものをA型、HBs抗原はIA法およびRPHA法で測定し、急性期にHBs抗原陽性で回復期に陰性化したものをB型、急性期にIgM分画HA抗体陰性かつHBs抗原陰性で、EBV、CMVなどの関与が認められないものを非A非B型とした。

結果および結論：1) 型別の頻度をみるとA型32、B型42、および非A非B型39例であつた。2) A型のうち国内散発例は14例、海外罹患例は18例で、平均年齢は前者32.7歳、後者28.8歳で、全例経過良好であつた。3) B型は国内散発例は32例で、うち6例は院内感染例であつた。また、輸血後B型肝炎7例は平均輸血量が7,340mlであつた。4) 非A非B型は、国内散発例18例のうち、2例は院内感染とみなされた。海外罹患例6例、輸血後肝炎23例であり、散発例と輸血後例とを比較すると、前者に遷延例は認められず、後者に4例認められた。5) その他、発黄、肝機能、組織所見などについても対比検討をした。

23. 炭酸ガスレーザーによる手術創の組織学的研究

(皮膚科)

○肥田野 信・水津 礼子・水口 美知

炭酸ガスレーザーメスは接触しないでも切れ、かつ周囲の組織損傷が少ないといわれている。これを実際の人